

## 読書行為論の展開

——イーザーとバフチンをめぐって——

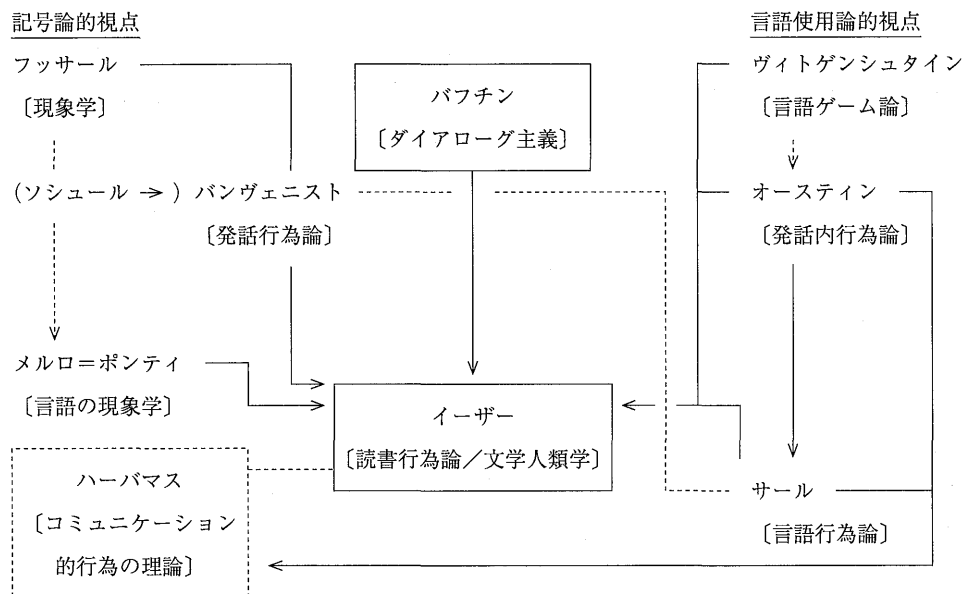
上 谷 順三郎

### 1. 読書行為論の現在——行為論的關係図

読書行為論研究はすなわちイーザー (Iser, W., 1926-) 研究である。これはつまり、読書行為論とはイーザーの提唱したものにほかならないことを意味すると同時に、イーザー以外にはあてはまらないものであるということの意味している。したがって、読書行為論の現在を考えることはすなわちイーザーの現在を考えることと同じことになる<sup>①</sup>。

この読書行為論であるが、その特徴は、一言で言えば「行為論」的観点にある。読書を行為として (Der Akt des Lesens) みたことがそもそもの始まりなのである。この行為論的観点によって、イーザーの理論は広範囲にわたる学際的なものとなったと考えられる。

イーザーの読書行為論の現在を考えるにあたり、ここでは、現代言語論を三つの視点 (精神分析的視点——無意識としての言語、記号論的視点——システム・構造としての言語、言語使用論的視点——行為・コミュニケーションとしての言語) から図式化している立川健二・山田広昭<sup>②</sup> に倣って、固有名詞による次のような関係図を描いてみる。



前図は、三つの視点のうちの一つである記号論的視点（左側）と言語使用論的視点（右側）の境界付近を取り出し、イーザーおよびメルロ＝ポンティ（Merleau-Ponty, M., 1908-1961）、ハーバマス（Habermas, J., 1929-）を書き加えたものである。境界にあたるのがバフチン（Bakhtin, M., 1895-1975）とバンヴェニスト（Benveniste, E., 1902-1976）そしてイーザーということになる。以下、簡単な説明を加える。

記号論的視点ではソシュール（Saussure, F. de, 1857-1913）を中心としてそして言語使用論的視点ではヴィトゲンシュタイン（Wittgenstein, L., 1889-1951）を中心として構成されている図であるが、この図にイーザーを入れてみると、まるでイーザーを中心に構成された図のように見えてくる。しかも、これにメルロ＝ポンティやハーバマスを入れることで、哲学・社会学をも含めた行為論の全体図ができあがる。すなわち、フッサール（Husserl, E., 1859-1938）に端を発する現象学の系譜とヴィトゲンシュタインに端を発し、オースティン（Austin, J. L., 1911-1960）、サール（Searle, J., 1932-）へと展開する言語行為論の系譜が交差するところにイーザーの読書行為論があり、一方でコミュニケーション的行為の理論との関連も期待されるのである。

また現在のイーザーが文学人類学（literary anthropology）を提唱していることを考えるなら、先取りした言い方になるが、複数の研究領域を関連づけている存在として、イーザーはバフチンと似た位置にあるとも考えられる。バフチンと言えば、ドストエフスキーやラブレールの研究で有名であるが、ことばを対話として捉える視点はその後の多くの研究領域に影響を及ぼした。そういう意味でイーザーは、現代におけるバフチンの後継者と言ってもいいのかもしれない。

イーザーに関しては、従来、受容理論の系譜としてフッサールやインガルデン（Ingarden, R.）の現象学およびガダマー（Gadamer, H. G.）等の解釈学との関連で論じられることが多く、また同じコンスタンツ学派のヤウス（Jauss, H. R.）との比較でテキスト理論的側面という限られた面に着目されることが多かった。もちろんこういった方面での議論は今後も重要であるし、直接的に読書行為論を応用する際には欠かすことのできないものである。しかし、読書行為論の本来的な理解とその応用のためには、より広い範囲にわたる理論的検討も必要とされるのである。

現在のところまだ、読書行為論の原型と考えられる言語行為論との関連（影響関係だけではなくより広く言語行為として読書行為を見ていく方向も含めて）についての研究や認識論としての行為論（ハーバマスのコミュニケーション的行為の理論）との関連についての研究<sup>9</sup>は少ないが、ここではそういった研究の必要性を指摘するだけにとどめておく。また小論では、読書行為論の新たな展開の可能性を探るために、文学人類学そのものの検討よりも、イーザーとバフチンの類似性に焦点をあてて考えていきたい。

## 2. 読書行為論の新しい展開——行為論的展開

ここでは、次に掲げるイーザーの最近の二著を通して、読書行為論の新しい展開すなわち行為論的展開を跡づけてみたい。

*Prospecting: from reader response to literary anthropology,*

The John Hopkins University Press, Baltimore and London, 1989. (Paperbacks edition, 1993) *Das Fiktive und das Imaginäre. Perspektiven literarischer Anthropologie*, Suhrkamp Verlag Frankfurt am Main, 1991.

(*The fictive and the imaginary: charting literary anthropology*,

The John Hopkins University Press, Baltimore and London, 1993)

参照する文献としては、『展望——読者反応から文学人類学へ』(以下『展望』と略す。)についてはペーパーバック版(1993)を、そして次の『虚構的なるものと想像的なるもの——文学人類学の海図』(以下『海図』と略す。)については英語版(1993)を用いることにする。

最初に言っておくと、イーザーはこの二著において初めてバフチンを引用している。また、アリストテレス(Aristotle)なども登場して、演劇論への言及も増えている。従来よりもテキストの行為者(performer)としての読者の機能が強調され、文学は遊び(play)となりゲーム(game)となる。そして読者は自分自身を演じる者(performer)とされる。「行為・演技(performance)」は、イーザーの新しい理論にとって中心的な概念になっているのである。このように、この二著におけるイーザーの読書行為論の新しい展開は、より行為論的観点を強めていると見ることができる。

『展望』の中でイーザーは、読者反応理論(reader-response theory)——読書行為論もこの中に含まれる——を「表象(representation)」という考え方として再評価し、文学は人間の可能性を演じ続けるものである、という「(テキストを)遊ぶ理論(play theory)」を繰り広げている。そこで本章では、「表象」と「遊ぶ理論」を中心に見ていくことにする。

表象ということばは、かなり抽象的で捉えにくいことばである。またミメシス(mimesis, 模倣)と交換可能なことばと考えられている。そういった混同を避けるため、イーザーはよりニュートラルな語感を持つドイツ語のDarstellungということばと置き換えて、表象という行為以前には客観的な対象とはかかわらないとみている。つまり、模倣ということよりは演技ということ(performance)に力点を置いて表象を捉えているのである。そしてイーザーは、読書行為論にみられる代表的な二つの術語、すなわち虚構性における二重構造である「選択(selection)」と「結合(combination)」という二つの行為と関連づけて、表象についての議論を展開している。(pp. 236ff.)

なお、表象についての説明として次に引用するものは、上の議論および以下の議論を理解するうえで参考となるだろう。

(前略——引用者) 現代の表象理論における当然の問題として、美学あるいは記号学でいう<sup>リプレゼンテーション</sup>表象(他の事物を「代理する」<sup>スタンド・フォー</sup>事物)と、政治的意味での代表(他の人間に「代わって行為する」人間)との関係が取り沙汰されることになった。そして、このようなふたつのリプレゼンテーションの重なりが明確になる場が劇場である。劇場では人間(俳優)が他の(たいていは虚構の)人物を表わしたり、その人物に「扮したり」する。もちろん、ハムレットを演じるローレンス・オリヴィエと大統領という役をこなすロナルド・レーガンのあいだに

は大きな差異——演技と実人生、厳密な台本と自由な即興パフォーマンス、美学的な約束事コントラクトと法的な契約コントラクトといった差異——がある。しかし、差異ばかりに気をとられて、このふたつのリプレゼンテーション形式の構造的な類似性が、また、あらゆるリプレゼンテーション形式における遊戯的な虚構性と厳粛な現実性との複雑な相互作用が、みえなくなつてはならない。ロナルド・レーガンが俳優から身を起こし、その後一貫して大統領という役職の象徴的・演劇的特性を利用しつづけた事実は、リプレゼンテーションの美的・記号的形式〔表象〕と政治的形式〔代議制度〕とのつながりが不可避であることをあらためて思い起こさせてくれる<sup>(4)</sup>。

この引用はまた、その後レーガンがアルツハイマー症候群の代名詞的代表的存在となったことをも思い起こさせて、妙になまなましい。

さて先の二つの行為は、またそれぞれが二重性ともかかわっている。すなわち、選択の行為ではテキストそれ自体が一つの結節点となって、テキスト対テキスト、規範対規範、価値対価値といった対立を引き起こし、それが読者によって現実化されることで、より多くの様相を呈することになる、という二重の過程をとるのである。

また結合の行為では、全てのことが対話的 (dialogic) となり、また全ての意味の場が互いに重なり合う。この二重の声による言説 (double-voiced discourse) によって、全ての発話は何か他のものを新たに加えていく。そうすることで結合の行為は、現在あるものの二重性をまさに今ないものによって生み出す——しばしば逆転されることによってバランスをとっていくというプロセスと不在に光をあてることによってのみ照らし出される現在——このようにして、言われていることは自ら意味することをやめ、そしてその代わりに言われていないことを存在 (present) に変える。結合の行為によって生み出される二重の意味は、テキスト内の相互連絡に大きな可能性をひらくのである。

つまり、選択の行為はテキスト外の関係の場を引き合いに出すと同時に変形することによって相互関係のネットワークを引き起こし、そうすることによって美的特性を生じさせる。一方、結合の行為は不在を存在に刻み込むことによって美的特性のマトリクスとなる。逆にまたこの二重化作用は、文学テキストの虚構性から起こってくることであり、読者へ働きかけ、またテキストを具体化するという二つの異なったレベルにあらわれるものなのである。逆から言えば、虚構化という行為は、テキスト外の場とテキスト内の変形を引き離したり包含したり (選択)、テキスト内の意味を囲い込んだりそれらを相互にはまりこませたり (結合)、そして最終的には一つの一括された世界と経験的な世界の宙吊り状態との差異を現出させる。しかしその差異は、たとえば部分的重複や簡約化、美観をそこなわれた状態、置換、反映、劇化などによって乗り越えられるものなのである。

結局のところイーザーは、伝統的な議論の対象となっている表象の行為的側面を強調することで読書行為論の虚構化にかかわる議論と結びつけ、表象を演技・パフォーマンスおよび外形から構成されたものと捉えることで、再評価している。演技と外形を読者の想像力によっていか

すことによって、つまり読者が内包された読者というより内包された役者として自ら行為することによって、表象はテキストから読者へと転移すると考えるのである。そして文学テキストを読むということを上演すること (staging) と重ねて考えることで、想像上のことを想像すること (image of make-believe) の人類学的な様相、つまり文学人類学の構想が可能となる。

ここにきて、イーザーの表象理論は、「遊ぶ理論」とかかわってくる。表象の上位概念として「遊ぶこと」が加わってくるのである。

従来のイーザーの議論であれば、「作者」は登場しない。読書はテキストと読者の相互作用として記述されてきた。しかし「遊ぶ理論」においては作者が登場し、テキストおよび読者を交えた三者によって、それまでにない新しい何かを生み出すのが読書だと考えられている。この点についての再吟味はまた別の機会にゆずるとして、そのイーザーの三者間モデルをみてみたい。

三者間モデルによると、テキストという遊び場で作者と読者は遊ぶと考えられ、その契機には次の三段階が想定される (p. 251)。

#### 1. テキスト外

- a. 作者と作者が参加する世界との間
- b. テキストとテキスト外の世界との間ならびにテキストと他のテキストとの間

#### 2. テキスト内

- a. テキスト外のシステムから選択された項目の間
- b. テキストの中に作られている意味的なまとまりの間

#### 3. テキストと読者の間

- a. 読者の自然な態度 (まさに一括されていない状態) と引き受けさせられる態度との間
- b. テキストに繰り返しあらわれる世界によって示されるものと、まさに類似性を示されることによって輪郭がわかることになっているものとの間

そしてまた、それぞれのレベルは、次の三つの観点のもとで遊びとなっていく。

1. それぞれのレベルに関して、区別可能な立場が互いに対決させられる。
2. 対決は、遊ぶことの基本である前後の動きを誘発する。そしてその結果出てきた違いはある結末に到達するために無効とされる。
3. 各立場の間の継続的な動きは、それぞれの多くの異なる面を明らかにする。そしてある者が他をじゃますると、さまざまな立場そのものがついには変態させられる。これらの相違の一つ一つは遊びへの余地すなわちそれゆえ変態ということを示しているのだが、このことから、われわれの議論の初期の段階においてさえも、表象についての伝統的な概念が疑われることになると思われる。

「遊ぶ理論」に関しては、以上のように、遊ぶという動機と動き、終わりへの方向性、意思決定などによって遊びの多様性が示されている。そして、遊び以前には意味は存在しないことがあらためて確認される。なお、作者と読者との間の遊び場として、文学テキストが三つのレベル——構造的、機能的、解釈的——から記述されたり、テキストのゲームということを検討すべくゲー

ムのタイプとルールについて議論が展開されたりもする。そして最終的には、認識論の立場と人類学の立場の両方から「遊ぶ」ことを意義づけている。しかしこれらについて論述する余裕はないので、これについても他日ということにしたい。

以上、「表象」と「遊ぶ理論」をめぐって、イーザーの理論の行為論的展開についてみてきた。最後に、『展望』の序文(vii)にある次の言を引いて、次章へとつなぎたい。

もし文学テキストが読者に何かを行っているのなら、同時にわれわれに対してもそれら読者について何かを語ってくれるだろう。つまり、文学は古いの棒となるのであり、われわれの性格、欲求、嗜好そしてついにはわれわれの全体像を示してくれるのである。それならなぜ、われわれはこの種の特異なメディアを必要とするのかという問いが起こってくる。こういった問いに答えてくれるのが、つまりは文学人類学であり、それは読者反応理論を支えそこから派生するものなのである。

### 3. 文学人類学への展開——バフチンへの接近

本章では、『海図』によってイーザーの文学人類学の概要を確かめ、あわせてバフチンとの関連についても言及していく。

なぜ文学が人間にとって必要なのかという問題を考えるに際しては、従来的人类学——哲学的人類学、社会人類学、構造主義的生成主義的人类学、歴史人類学——もいくつかのヒントは与えてくれる。が、それだけでは不十分であるとして、イーザーは、文学を通して人間が自己を解釈するための手順を発見するために、文学人類学を構想するに至った。

別な言い方をすれば、文学研究は、文学という虚構を生み出すことが人間にとってどういう意味をもっているのかを問う方向へ、つまり新しい文学人類学の構築の方向に向かうべきであるというのである。そこでは、人間とは虚構を生み出す存在であるという人間論を中核に据えて、ではなぜ人間はそういった虚構を求めるのかを探究する。結論的に言えば、虚構化の行為を通して、人間は、世界観という形で欲望を具体化し、同時に世界を虚構化して生きている自分の在り方を突き放して眺める地点に立つことが可能となる、ということになる。これが人間にとって必要な文学の効果であるという。

またイーザーは、文学を虚構として現実に対立させてきた文学論に対しては、そうした二項対立的な枠組みでは、虚構を求める人間の在り方がうまく説明できないという。この点は、バフチンのダイアローグの思想と通じるものがある。つまり、前提としての多元性である。そしてまたこの前提はイーザーにあっても新しいものである。

そこで試みられたのが、〈虚構的なもの〉(the fictive)と〈現実的なもの〉(the real)に加えて、〈想像的なもの〉(the imaginary)という第三項を導入したことである。詳しくは述べないが、先の新しい前提に加えて、この試みが、バフチンのカーニヴァル的なものとの関連を強めたと考えられる。

人間が虚構を生み出すという行為をするのは、虚構でもって現実を映し出すといったミメシ

スの働きを求めただけではない。そこには、現実の姿とともにそれを描いた人間の目的、態度、経験などが、同時に表現されるのである。こういった二重化作用が、人間の〈想像的なるもの〉の所産であるが、従来の虚構と現実という二分法では、こうした人間の虚構を生み出すメカニズムがうまく説明されないのである。

以上のことを確認した上で、この〈想像的なるもの〉をテキストに映し出すために必要とされるのが〈虚構的なるもの〉であるという。そして〈虚構的なるもの〉は、世界に意味を求める人間に世界の姿を提示するのだが、同時にそれがまた虚構であることをも知らせ、虚構と遊ぶ人間のありさまを確認させるといのである。つまり、遊びは〈虚構的なるもの〉と〈想像的なるもの〉の共存から生み出されるという結論になる。

上で眺めたように、イーザーの文学人類学は、従来のイーザーの理論（読書行為論）の延長に位置すること——たとえば受容研究的な視点の継続——はもちろん、『展望』からの発展であることも確かめられる。そしてバフチンへの接近をここに認めることもできるだろう。

#### 4. イーザーのバフチン受容<sup>6)</sup>

『展望』と『海図』で初めて、イーザーはバフチンを引用した。ここでは、それら引用箇所のいくつかを紹介する形で、イーザーのバフチン受容の一端を確かめてみたい。

シェークスピアの『お気に召すまま』における二重の意味のドラマ化を論じた中では、バフチンの〈ダイアローグ的混成体 (dialogized hybrid)〉に言及し、二つの発話が一つに融合し、話し手が、話していない声によってすぐにとって代わられる状態にある時、つまり沈黙の声が話している声の上を覆っている時のことと説明されている。(『展望』 p. 100)

また同じ文章の中で、修辞の〈カーニヴァル化 (carnivalization)〉として引用し、二重の意味という修辞が、ある発話とそれが排除した発話を共存させ、言われたことの上に転位された反響音を生じさせる時としている。(『展望』 p. 115)

さらに、文学的虚構性についてその二重性と統一性を通して文学人類学的示唆を述べる中では、〈外在性〉という考え方を利用する。文学的虚構性における忘我状態とは、実際に自己を超越し身体から離脱することではなく、むしろ夢をみているながらそれを夢だと自覚しているのに似ているが、このことを「自己の外に自己を発見する」状態としてイーザーは説明している。(『海図』 p. 84)

この他にもイーザーは、ことばの対話的性格などについてバフチンを援用しているが、こういった関連性の考察は今後の課題としたい。

#### 5. 今後の課題——国語の授業の対話的構造化に向けて

イーザーの読書行為論の展開をみるにあたって、小論ではその行為論的側面に着目した。今後の読書行為論研究およびイーザー研究にとっての新しい展開をいくらか予測することはできたが、まだ一つの見取り図を示したにすぎない。課題は多く残されている。

いくつか挙げるなら、『展望』および『海図』に見られるイーザーの新しい理論を詳しく検討すること、あわせてバフチンとの対応関係を跡づけること。また、バフチンのダイアローグの思想の全体像をつかまえること、そうして行為論的關係図の内実を明らかにすること。こういった多くの課題が残されているが、これらを解決していくには、たとえばホール・ランゲージをめぐる研究のように、核としての教育的視点が必要とされるだろう。そういった意味で、国語の授業の対話的構造化（あるいはコミュニケーション教育）に向けた研究というのが、現実的な目標ということになる。

〔注〕

- (1) 拙稿「読者論の理論——イーザーを中心に——」（田近・浜本・府川編『「読者論」に立つ読みの指導 小学校中学年編』、東洋館出版社、1995.2.10, pp.173-188)を参照のこと。
- (2) 立川健二・山田広昭『現代言語論』（新曜社、1990.6.15）
- (3) たとえば、拙稿「西ドイツの文学教育におけるコミュニケーションの問題」（全国大学国語教育学会編『国語科教育』第37集、1990.3.31, pp.131-138）など。
- (4) F.レントリッキア、Th.マクローリン編、大橋洋一他訳『現代批評理論——22の基本概念』（平凡社、1994.7.11）p.28（ed. Lentricchia, F., McLaughlin, Th., *Critical Terms for Literary Study*, The University of Chicago Press, Chicago, Illinois, 1990）
- (5) マイケル・ホルクウィスト著、伊藤誓訳『ダイアローグの思想』（法政大学出版局、1994.6.15）を参考にした。（Holquist, M., *DIALOGISM*, Routledge, Chapman & Hall Ltd, 1990）